

場所句倒置に関する日英語の統語的相違点*

Syntactic Differences on Locative Inversion between Japanese and English

谷川 晋一

(Shin-ichi Tanigawa)

1. 序論

本稿は、生成統語論の観点から、(1) に示す日英語のいわゆる場所句倒置について論じる。

- (1) a. 公園にジョンの弟がいた。
- b. In the park was John's brother.

(1) では、前置詞句／後置詞句で表わされる場所句が文頭に現れ、それに動詞と名詞句が後続する形式がとられている。よって、上記の日英語の構文は、動詞の位置を除けば、表層上の語順に関して、対応関係を持つように見える。英語に関する先行研究では、このような文は場所句倒置構文と呼ばれてきた一方で、日本語の当該文に関しては、Kuno (1973) では、存在文 (existential sentence)、Kishimoto (2000) では、場所・存在文 (locative-existential sentence) と呼ばれている。本稿は、日英語の比較考察を行う性質上、用語に関する混乱を避けるため、Ura (1996, 2000) に従って、日本語の当該文も便宜上、場所句倒置構文と呼ぶことにする。

本稿の主たる議論の構成は、以下の通りである。2 節では、3 節と 4 節の議論に先立って、場所句倒置に関する研究の背景と問題の所在を明らかにする。3 節では、日本語の場所句倒置においても、場所句が TP 指定部に移動すると主張する Ura (1996, 2000) の分析や考察を批判的に検討した上で、場所句倒

置が日英語間で異なる統語派生を持つことを示す。最後に、4節では、3節の議論から得られる今後の研究における課題と現時点での筆者の見解について述べる。

2節以降の主たる議論に移る前に、当該構文で用いられる動詞と名詞に関して言及をしておくことにする。まず、動詞に関しては、日本語の場合、Kuno (1973) 以来、存在動詞「いる／ある」が典型的に用いられる一方で、英語の場合、「いる／ある」に対応すると考えられる *be* 動詞に加え、“*lie*”や“*hang*”の存在を表わす非対格本動詞も使用可能であると言われている。本稿も、それに沿った形で、日本語の場合には、「いる／ある」を、英語の場合には *be* 動詞と非対格本動詞の両方を用いた例を提示することとする。

次に、名詞句に関して言及をしておく。一般に、日本語の主語名詞句は、主格の格助詞「が」で標示するが、それを、話題を表わす助詞「は」で置き換えることが可能である。ただし、この助詞の違いは、構造的位置の違いに反映される可能性があり、本稿の議論に多大な影響を与えるものである。場所句倒置構文の名詞句としては、(1) に挙げる定名詞句に加え、不定名詞句も使えるが、日本語の場合、定性に関わらず、「が」もしくは「は」を使用可能である。文脈等の指定がない限り、必ずその一方を用いなければならないという特別な制約はない。よって、本稿では、生成文法に基づく先行研究に従って、日本語の主語名詞句や場所句倒置構文の名詞句については、規範格である主格「が」で標示されたものを一律に用い、場合によっては、主格が出やすい「こと」を使った埋め込み節を用いて議論を進めていく。

2. 研究の背景と問題の所在

英語の場所句倒置は、一般に、名詞句と場所句の両方が VP 内に生成される (2) のような基底構造を持つと分析されている。

(2) [VP was John's brother in the park]

ここでの場所句は、文を意味的に成立させる上での必須要素、すなわち、項であると考えられるため、VP 内に生成されている。この分析の妥当性は、英語では付加詞の前置詞句を用いて (1b) の倒置語順形式を作ることができないという統語的観点からも支持されるであろう (Coopmans (1989:735) を参照)。

この基底構造からは、二種類の文が生成可能であると考えられている。まず、(3a) のように、名詞句が TP 指定部に移動すると“John's brother was in the park.”のような規範語順の文が生成される。その一方で、(3b) のように、場所句が TP 指定部に移動し、名詞句が VP 内に残留すると場所句倒置が生成される (Bresnan (1994) や Collins (1997) 等を参照)。

- (3) a. [TP John's brother [VP was t_{DP} in the park]]
b. [TP in the park [VP was John's brother t_{NP}]]

一般に主語位置とみなされる TP 指定部に名詞句ではなく場所句が移動するという考え方は有標的であるが、この分析を支持する事実として、(4) に示すような繰り上げ等において、場所句と主語名詞句の間に平行性が存在することを示す事実が指摘されている。

- (4) a. John's brother seems to have been in the park.
b. In the park seems to have been John's brother.

このような事実を基に、多くの先行研究では、(3b) の派生方法が採用されている。本稿も、英語の場所句倒置に関しては、大筋で (3b) の派生方法を採用することにするが、この点については、3 節や 4 節でも議論する。

(3) に挙げるような分析方法は、日本語の場所句倒置に関する先行研究においても採用されている。日本語の場所句倒置では、「に」で標示される後置詞句が場所句として用いられるが、この「に」で標示される後置詞句は、「で」

で標示される付加詞の後置詞句とは異なる振る舞いを示すため、項であると考えられている (Takezawa (1993) や中右 (1998) 等を参照)。これに従うと、場所句倒置の基底構造としては、場所句と名詞句の両方が項として VP 内に生成される (5) が仮定できる。

- (5) [VP ジョンの弟が 公園に いた]

Ura (1996, 2000) や竹沢 (2000) は、(5) のような基底構造を念頭に置いた上で、名詞句が TP 指定部に移動した場合には規範語順文 (6a) が、場所句が TP 指定部に移動した場合には、場所句倒置 (6b) が得られるという見解をとっている。

- (6) a. [TP ジョンの弟が [VP t_{DP} 公園に いた]]
b. [TP 公園に [VP ジョンの弟が t_{TP} いた]]

このように、英語に関する多くの先行研究や日本語に関する Ura (1996, 2000) や竹沢 (2000) の分析に従うと、日英語の場所句倒置の形式は、「場所句の TP 指定部への移動」という統一的な形で導かれることになる。しかしながら、筆者としては、日英語の場所句倒置が同じ派生を持つという見解を率直には受け入れることができない。その根拠の一つとしては、日本語の場所句倒置には、もう一つの派生方法が適用可能であることを挙げることができる。よく知られているように、日本語には、(7b) に示すように、目的語名詞句や後置詞句等がスクランブリングにより主語上位の文頭に移動したと分析される (7a) のようなスクランブリング文が存在する。

- (7) a. メアリーにジョンが花束を渡した。
b. [TP メアリーに_i [TP ジョンが_j [VP t_i t_j 花束を 渡した]]]

Saito (1985) をはじめとする研究に従うと、文頭へのスクランブリングでは、

TP 付加位置に要素が移動する派生が適用されることになるが、日本語の場所句倒置にも、原理上、同様の派生が適用可能である。すなわち、(8) に示すように、主語が TP 指定部に移動し、さらにその上位の TP 付加位置に場所句がスクランブリングにより移動する派生である。

(8) [TP 公園に [TP ジョンの弟が [VP t_{DP} t_{PP} いた]]]

日本語の比較的自由的な語順は、スクランブリングの広い適用に起因すると言われている。よって、スクランブリングを用いた派生が場所句にも適用されると考えることは決して不自然なことではない。

もちろん、スクランブリングによる場所句倒置形式の生成は、先行研究においてまったく検討がなされてこなかったわけではない。例えば、Ura (1996, 2000) は、(8) のようなスクランブリングによる派生方法への批判的検討を行っている。しかしながら、筆者が見る限り、Ura (1996, 2000) の提示している考察は十分であるとは言い難く、用いているデータも適切ではないといった問題が散見される。3 節では、Ura (1996, 2000) の分析を批判的観点から詳しく検討した上で、日英語の場所句倒置が異なる統語派生を持つことを示す。

3. 場所句倒置構文の統語派生と構造

2 節で述べたように、日本語の場所句倒置には、二つの派生方法が想定可能であるが、3 節では、この点について検討を行っていく。具体的には、Ura (1996, 2000) の分析を批判的に検討しながら、二つの派生方法のうち、スクランブリングによる派生方法が日本語の場所句倒置には妥当であることを論じ、場所句倒置の統語派生が日英語間で異なることを示す。

3.1. 日本語における場所句倒置の分析：Ura (1996, 2000)

3.1 節では、Ura (1996, 2000) の分析と、それを支持する根拠として Ura 自身が提示している事実を概説する。

Ura (1996, 2000) は、日本語の場所句倒置に対して、Chomsky (1995) の枠組みに基づいて、以下のような詳細な分析を提示している。

- (9) a.

[TP	[VP	[DP 公園に]	[DP ジョンの弟が]	いた]	T ⁰]
		[Case]	[uNom]			[uNom]	
		[φ]	[φ]			[uφ]	
		[D]	[D]			[EPP]	
- b.

[TP	[DP 公園に]	[VP	t _{DP}	[DP ジョンの弟が]	いた]	T ⁰]
		[Case]		[uNom]			[uNom]	
		[φ]		[φ]			[uφ]	
		[D]		[D]			[EPP]	

この分析では、場所句が PP ではなく DP であるとみなされている。これ準じて、場所句は、解釈可能な φ 素性と D 素性を持っており、動詞から内在格を付与された結果、助詞「に」が付随している。この場所句と名詞句は、ともに D 素性を持ち、且つ T⁰ から等距離であるため、どちらが T⁰ の持つ EPP 素性と照合関係に入ってもよい。場所句倒置形式が得られる場合には、場所句の D 素性が T⁰ の EPP 素性と照合関係に入ることになるが、EPP 素性は強素性であるために場所句は顕在的に TP 指定部に移動する。これにより、T⁰ の EPP 素性と解釈不可能な φ 素性は削除される。T⁰ と名詞句には、解釈不可能な主格素性 (uNom) が残っているが、これは弱素性であるため顕在的な移動を必要としない。LF において、名詞句の主格素性が T⁰ に移動することにより、二つの主格素性は削除される。また、Ura 自身は、明確に述べていないが、名詞句・場所句の規範的な語順形式が得られる場合には、名詞句が TP 指定部に顕在的に移動することによって、すべての解釈不可能素性が削除されるはずである。

一方、Ura (1996, 2000) は、英語の場所句倒置には、詳細な分析を提示していない。場所句が TP 指定部に移動する可能性は示唆しているものの、どのようなメカニズムで TP 指定部に移動するか等については言及していない。¹ し

かしながら、メカニズムの詳細は明らかでないにしても、Ura (1996, 2000) の議論に従うと、日英語の場所句倒置は、場所句が TP 指定部に移動するという点で、派生上の共通性を持つことになる。

さて、Ura (1996, 2000) は、(9) のような分析を提示すると同時に、この分析が前節の (8) に示したようなスクランブリングによる分析よりも妥当である根拠をいくつか提示している。ここでは、そのうちの三つの根拠に目を向けることにする。一つ目の根拠は、再帰代名詞「自分」の束縛に関する事実である。

(10) あの委員会_iに自分たち自身_iの歴史を批判した人物がいる。

Ura (1996, 2000) によると、主語指向の再帰代名詞「自分」は、T⁰の EPP 素性を満たした要素、すなわち TP 指定部に位置する要素によって束縛される。よって、(10) の場所句倒置において、場所句が「自分たち自身」を適切に束縛できるような事実は、場所句が TP 指定部に移動することを示唆すると Ura (1996, 2000) は述べている。

二つ目の根拠は、PRO コントロールに関する事実である。Ura (1996, 2000) によると、日本語の「ながら」節には PRO が存在し、そのコントローラになるのは、主節の T⁰が持つ φ 素性と照合関係に入った要素である。そして、場所句倒置では、(11a) と (11b) に対比されるように、PRO をコントロールすると考えられるのは場所句であるため、場所句が T⁰の持つ φ 素性と照合関係に入るといふ分析を支持することになると Ura (1996, 2000) は述べている。

- (11) a. [PRO_i 設備不足で困っていながら]、あの病院_iにたくさんの患者がいる。
- b. * [PRO_i 健康を心配していながら]、あの病院にたくさんの患者_iがいる。

三つ目の根拠は、Kuno (1973) に由来する数量詞のスコープに関する特性で

ある。

(12) どこかに誰もが出た。

 どこか > 誰も

 *誰も > どこか

スコープは、LFにおけるc統御関係で決定されるが、Ura (1996, 2000) の分析に従うと、場所句倒置の場合、顕在的統語部門でTP指定部に移動している場所句が、LFにおいても、動詞句内にある名詞句を非対称的にc統御する。よって、この分析からは、場所句倒置の場合、場所句が名詞句よりも広いスコープをとる解釈のみが得られると予測される。² Ura (1996, 2000) によると、(12)において、場所句の「どこか」が名詞句の「誰も」より広いスコープをとる一義的な解釈しか得られないため、このスコープ解釈の一義性が自身の分析を支持するものになると述べている。

3.2. Ura (1996, 2000) の問題点

3.1 節では、日本語においても、場所句がTP指定部に移動するというUra (1996, 2000) の分析と、それを支持するものとしてUra自身が提示している三つの根拠を概説した。3.2 節では、それらのデータや考察が適切でないことを指摘しつつ、それらに関するよりの確なデータや考察を提示する。このことで、日本語の場所句倒置に関しては、場所句がTP指定部に移動する分析ではなくスクランブリングを用いた分析が妥当であることを示す。

まず、Ura (1996, 2000) の分析における決定的な問題点について述べる。Ura (1996, 2000) は、場所句がDPであり、それ自体が ϕ 素性を持つと仮定していたが、この点が明らかに妥当でないと言える。これは、Muromatsu (1995) も指摘しているように、場所句倒置の場所句が名詞句ではなく、後置詞句であることを示す根拠が数多くあるためであるが、ここではその根拠の一つを見ることにする。一般に、助詞「は」を使って名詞の話題化を行う場合、(13) に示

すように、それに付随する「が」等の格助詞は抑制され、その代わりに「は」が付与されなければならない。これとは対照的に、「東京から」のような後置詞句を話題化する場合、(14) に示すように、後置詞を残しつつその後ろに「は」を付与する必要があるが、後置詞を抑制することはできない。

- (13) a. ジョンが公園で遊んでいる。
b. * ジョンがは公園で遊んでいる。
c. ジョンは公園で遊んでいる。
- (14) a. 東京から友達が来た。
b. 東京からは友達が来た。
c. * 東京は友達が来た。

これを踏まえた上で、場所句倒置を見ると、(15) に示すように、場所句を話題化する場合、必ず「に」を残す必要があるため、場所句の「に」は「から」のような後置詞と同じ振る舞いを見せることがわかる。

- (15) a. 公園にジョンの弟がいた。
b. 公園にはジョンの弟がいた。
c. * 公園はジョンの弟がいた。

また、(15) に示す場所句の振る舞いは、場所句と同じように「に」が付随する要素でありながら、話題化する場合に「に」が抑制可能な与格名詞句の振る舞いとも異なる。

- (16) a. ジョンにフランス語が話せる。
b. ジョンにはフランス語が話せる。
c. ジョンはフランス語が話せる。

このことから、場所句倒置の場所句は、その範疇が名詞句や名詞句を含む決定詞句ではなく、後置詞句だということが強く示唆される。

上記のように、Ura (1996, 2000) の分析には、場所句の範疇に関して決定的な問題点が存在する。加えて、以下に示すように、日本語の場所句が、素性照合の結果、TP 指定部に移動することを支持する根拠とされていたデータにも大きな問題が存在する。3.1 節では、三つの根拠を見たが、ここではそのそれぞれについて批判的に検討していくことで、日本語の場所句倒置では、名詞句・場所句の規範語順文と同様に、名詞句が TP 指定部に移動すると分析するのが妥当であることを示す。

まず、一つ目の根拠として提示されていた、場所句倒置では、場所句が再帰代名詞「自分自身」を束縛するという根拠を検討する。

(17) あの委員会_iに自分たち自身_iの歴史を批判した人物がいる。

上で示したように、場所句倒置の場所句はそもそも後置詞句であると考えられる。よって、場所句が「自分自身」を束縛するという見解はいささか受け入れ難いものの、(17) の容認度が高いという判断には筆者も同意する。ただし、この文の容認度が高いのは、場所句が「自分自身」を束縛していることに起因するわけではないと考えられる。ここで注意したいのは、(17) の「自分たち自身」が関係節の中にあることである。「自分たち自身」が再帰代名詞であるとするれば、それは、束縛原理 A に従って、局所的に c 統御される必要があるが、そもそも主節にある「あの委員会」が関係節内の「自分たち自身」を局所的に c 統御することは不可能である。この例文が容認されるのは、(18) に示すように関係節の主要部である「人物」に対応する空代名詞 *pro* が関係節内で「自分たち自身」を局所的に c 統御することに起因すると考えられる。

(18) あの委員会に [*pro*_i 自分たち自身_iの歴史を批判した] 人物_iがいる。

つまり、(17)において「自分たち自身」と直接的に同一指示になるのは、実際のところ、「人物」だと考えられる。結果的に、「あの委員会」と「自分たち自身」があたかも同一指示であるかのような解釈ができてしまうのは、動詞「いる」の使用により、その人物が委員会の一員、すなわち「その人物=あの委員会」と解釈できることに因るのではないかと思われる。実際、(17)とは対照的に、(19)のように、動詞を「紹介する」にすると、人物が委員会の一員であるとは解釈できなくなるが、この場合には、「あの委員会」と「自分たち自身」を同一とする解釈ができなくなる。

- (19) *? ジョンとメアリーがあの委員会_iに自分たち自身_iの歴史を批判した人物を紹介した。

この場合には、「人物」を介しての間接的な同一指示関係が構築できないために、当該の解釈ができなくなると考えられる。

上記のように、Ura (1996, 2000) が提示している再帰代名詞に関する根拠や考察は、データ自体に問題があるため、不適切であると考えられる。加えて、以下に示すように、実際には、Ura (1996, 2000) の主張とは逆で、場所句倒置の場合にも、名詞句が束縛詞になると考えるのが妥当である。まず、規範的な形式である名詞句・場所句語順の場合、(20)のように、名詞句が場所句の中の「自分」を束縛可能である。

- (20) ジョンの弟_iが自分自身_iの部屋にいた (こと)。

これと同じ特性は、場所句倒置の場合にも見られる (岸本 (2005) も参照)。

- (21) 自分自身_iの部屋にジョンの弟_iがいた (こと)。

Ura (1996, 2000) も仮定しているように「自分」の束縛子が TP 指定部にある要素だとするならば、これらのデータは、場所句倒置の場合にも、名詞句が

TP 指定部にあること、延いては、日本語の場所句倒置の分析としては、スクランブリングを用いた分析の方が妥当であることを支持することになる。

次に、二つ目の根拠として挙げられていた、PRO コントロールのデータを検討する。Ura (1996, 2000) は、以下のような対比を基に、場所句が T^0 の ϕ 素性と照合関係に入ること、「ながら」節内の PRO をコントロールしていると論じていた。

- (22) a. [PRO_i 設備不足で困っているながら]、あの病院_iにたくさんの患者がいる。
b. * [PRO_i 健康を心配しているながら]、あの病院にたくさんの患者_iがいる。

上で示したように、そもそも場所句が ϕ 素性を持った DP で、 T^0 と照合関係を持つという考えがまず妥当ではないのだが、それもさることながら、ここでは「ながら」節の扱いにも疑問が生じる。確かに、「ながら」節には、英語の while 節等と同様に、PRO が含まれていると仮定できるが、ここで注意したいのは、「ながら」節に並行性を表す用法と逆説を表す用法の二つがあることである。

- (23) a. ソファに寝転びながら、ジョンがテレビを見ている。
b. 親が警官でありながら、ジョンが悪いことばかりしている。

(23a) のように、並行性を表す用法では、一般に、「ながら」節内にガ格主語が出現しないために PRO があると仮定できる。その一方で、(23b) のような逆説を表す用法では、下線で示すように、節内にガ格主語が生起できるため、この場合に PRO が存在すると仮定できるかに疑問が残る。Ura (1996, 2000) が提示しているデータを見ると、すべてが逆説を表す「ながら」節であるため、これらが本当に PRO コントロールを示すデータであるかが疑わしい。PRO と

みなされているものは、実際のところ、**pro** である可能性も否定できないため、(22a) が容認可能であるからと言って、場所句が T^0 の ϕ 素性と照合関係に入っているとは言い難い。

また、仮に逆説の「ながら」節に **PRO** が認められたとしても、Ura (1996, 2000) の提示する (22b) のような文が根拠として適切であるかにも疑問が生じる。(22b) の非文法性が、名詞句によって適切な **PRO** コントロールがなされていないことに因るのであれば、主節を名詞句・場所句の規範的な語順形式にした場合には、容認可能な文になると予測できる。名詞句・場所句語順の場合、主節 TP 指定部に移動し、 T^0 の ϕ 素性と照合関係に入るのは確実に名詞句であり、この名詞句が問題なく **PRO** のコントローラになると予測されるためである。しかしながら、この予測に反して、語順を変えても容認度が変わらないことに気付かれない。

(24) * 健康を心配していながら、たくさんの患者があの病院にいる。

筆者の直感では、(22b) や (24) が不適切なのは、副詞節と主節の意味内容に十分な逆説性を想起できないという、状況の不自然さに因るところが大きいと思われる。一般に、入院中の患者は自分の健康を心配しているのであって、「患者が自分の健康を心配しているのに入院している」という逆説的状況は想起し難い。そして、実際、以下のように、例文に少し手を加え、逆説の意味関係を出易くすると、名詞句が「ながら」節内の主語と同一になる解釈が得られる。

(25) 藪医者が多いと知っていながら、あの病院にたくさんの患者がいる (こと)。

これは、名詞句・場所句語順の規範的形式の場合と同じである。

(26) 藪医者が多いと知っていながら、たくさんの患者があの病院にいる (こと)。

もし Ura (1996, 2000) が言うように、逆説の「ながら」節にも PRO が存在するとするならば、この事実は、場所句ではなく名詞句が T⁰ の φ 素性と照合関係に入っていることを示唆するはずである。

「ながら」節に PRO が存在するか否かは不明確であるため、一般に PRO が仮定されている別の副詞節を用いて、場所句倒置の場合でも、名詞句が PRO コントローラになることを示すことにする。英語において、PRO が仮定される副詞節として (27a) のような without 節が挙げられるが、日本語でも意味的にそれと対応している (27b) のような「ずに」節が PRO を持つと仮定される (Perlmutter (1984) や Matsumoto (1990) を参照)。

- (27) a. John cheered Mary up [without PRO going to school]
b. [PRO_i 学校にも行かずに]、ジョン_iがメアリーを励ました (こと)。

そして、(28) に示すように、「ずに」節の PRO は、場所句倒置の場合でも、名詞句によってコントロールされる。

- (28) [PRO_i 注意に従わずに]、立ち入り禁止区域に記者たち_iがいた (こと)。

これは、名詞句・場所句語順の規範的な形式の場合と同じである。

- (29) [PRO_i 注意に従わずに]、記者たち_iが立ち入り禁止区域にいた (こと)。

もし Ura (1996, 2000) が言うように、この種の PRO コントロールが T⁰ の φ 素性と照合関係に入った要素に限定されるとすれば、上記のデータは、場所句倒置の場合にも、名詞句が T⁰ の φ 素性と照合関係に入っていることを示唆するととともに、スクランブリングを用いた分析が妥当であることの根拠になる。

最後に、三つ目の根拠として提示されていた数量詞のスコープについて検討する。Ura (1996, 2000) は、「どこかに誰もがいた」のようなデータを挙げていたが、筆者には、これを規範語順形式にした「誰もがどこかにいた」自体も少々判断がし難い。ここでは、普遍数量詞を「誰もが」から「どの学生も」に変えた文を用いることで、場所句倒置でも多義的なスコープ解釈が得られることを示す。問題の場所句倒置におけるスコープ解釈を見る前に、同じように、ガ格主語名詞句と「に」が付随する場所句が用いられる他動詞文のスコープ解釈から見ていくことにする。他動詞文のスクランブリング形式 (30b) の場合には、先行研究でも指摘されているように、スコープ解釈が多義的になる。

- (30) a. どの学生も建物のどこかに宝物を隠した。
どの学生 > どこか *どこか > どの学生
- b. 建物のどこかにどの学生も宝物を隠した。
どの学生 > どこか (S) どこか > どの学生 (P)

筆者の場合には、「建物の中に複数の場所・空間が存在するが、そのうちの一つに、学生の全員が宝物を隠した」という、場所句が主語名詞句よりも広いスコープをとる読みが一次的 (Primary: P) 読みとして得られる。加えて、規範語順文 (30a) で得られる「学生の全員について、それぞれに、宝物を隠した場所・空間が少なくとも一つ存在した」という、主語名詞句が場所句よりも広いスコープをとる読みが二次的 (Secondary: S) 読みとして得られる。これを踏まえた上で、場所句倒置を見るが、他動詞文のスクランブリング形式の場合と同一のスコープが得られることに注意されたい。

- (31) a. どの学生も建物のどこかにいた。
どの学生 > どこか *どこか > どの学生
- b. 建物のどこかにどの学生もいた。
どの学生 > どこか (S) どこか > どの学生 (P)

場所句倒置 (31b) の場合、得られる一次的解釈は、「建物の中に複数の場所・空間が存在するが、そのうちの一つに、学生の全員がいた」という、場所句が主語名詞句よりも広いスコープをとる読みであろう。加えて、規範語順文 (31a) の場合に得られる「学生の全員について、それぞれに、いた場所・空間が少なくとも一つ存在した」という、主語名詞句が場所句よりも広いスコープをとる読みも十分に二次的読みとして得られるはずである。³ 上記の (30b) と (31b) のスコープ解釈における同一性は、日本語の場所句倒置でも、通常のスランプリング文と同様に、名詞句が TP 指定部に移動し、その上位に場所句が移動することを示唆するであろう。

以上、3.2 節では、Ura (1996, 2000) が自身の分析を支持する根拠として提示していた再帰代名詞、副詞節内の PRO コントロール、数量詞スコープのデータや考察に問題があることを指摘した。また、それらに関する的確なデータを提示しながら考察を行うことで、Ura (1996, 2000) の提案するような場所句が TP 指定部に移動する分析が妥当でなく、スランプリングを用いた分析が妥当であると論じた。

3.3. 日英語の相違点

ここまでは、英語の場所句倒置と同様に、日本語の場所句倒置が場所句の TP 指定部への移動を含むという分析について批判的に検討してきた。これまでの議論に基づくと、日本語の場所句倒置には、(32) のように、スランプリングを用いた派生が適用されるはずである。

- (32) a. 公園にジョンの弟がいた。
b. [TP 公園に [TP ジョンの弟が [VP t_{DP} t_{PP} いた]]]

一方で、英語の場所句倒置の場合、先行研究の分析に従えば、以下のような派生が適用されることになる。

- (33) a. In the park was John's brother.
b. [TP in the park [VP was John's brother t_{PP}]]

3.3 節では、この日英語の派生の違いが、副詞節内の PRO コントロールの観点において、顕著になることを指摘して、3 節の議論を締めくくりにする。

3.2 節では、再帰代名詞、副詞節内の PRO コントロール、数量詞スコープの観点から、日本語の場所句倒置において名詞句と場所句のどちらが TP 指定部に移動しているのかを議論したが、この中で、英語に関しても同様の議論ができるのは、副詞節内の PRO コントロールである。⁴ 日本語の場所句倒置では、3.2 節でも示したように、副詞節内の PRO は、名詞句にコントロールされる。

- (34) [PRO_i 注意に従わずに]、立ち入り禁止区域に記者たち_iがいた
(こと)。

一方で、英語の場所句倒置では、副詞節内の PRO が名詞句によってコントロールされる解釈は非常に難しい (Coopmans (1989) も参照)。⁵

- (35) ?* In the restricted area were the reporters_i [without PRO_i
obeying the warning].

これは、名詞句・場所句の規範語順形式で得られる特性とは対照的である。

- (36) The reporters_i were in the restricted area [without PRO_i
obeying the warning].

このように、日英語の場所句倒置では、副詞節内の PRO コントロールに関して対照的な結果が得られる。この違いが何に起因するかであるが、やはり、これは、(32) と (33) に示したように、当該構文の名詞句が日英語において異なる位置にあることに起因すると考えられる。Ura (1996, 2000) の分析では、PRO は T⁰ の φ 素性と照合関係に入った要素にコントロールされると仮定され

ており、c 統御関係や要素の位置は考慮に入られていない。しかしながら、Lasnik (1996) では、(37) の There 構文のように、名詞句が当該の照合関係に入った場合であっても、VP 内部に存在する場合には PRO コントローラにならないという事実が指摘されているため、この仮定は妥当でないと言える。⁶

- (37) a. * There arrived three men_i (last night) without PRO_i saying hello.
b. ?* There seems to be someone_i available without PRO_i seeming to be eager to get the job.

この事実を説明するためには、従来仮定されてきたように、PRO は、c 統御される直近の名詞句にコントロールされるという見解を取るのが妥当だと考えられる。この仮定に加えて、without 節や「ずに」節は、基底的に VP ないしは vP に付加されるという仮定に基づけば、(37) では、動詞後の名詞句が副詞節内の PRO を c 統御できないために、当該の PRO コントロールができないという簡潔な説明ができる。⁷ これと同様の説明は、英語の場所句倒置にも当てはめることができる。英語の場所句倒置では、場所句が TP 指定部に移動し、名詞句が VP 内に残留している。よって、VP や vP に付加した副詞節内の PRO は、VP 内に残留した名詞句から c 統御されないため、名詞句による PRO コントロールが不可能ということになる。一方、日本語の場所句倒置では、名詞句・場所句の規範語順文と同様に、名詞句が TP 指定部に移動している。名詞句は、この位置から基底的に VP や vP に付加した副詞節内の PRO を c 統御するため、日本語の場合には、当該の PRO コントロールが可能ということになる。

以上、3 節では、Ura (1996, 2000) の分析を批判的に検討した上で、英語の場所句倒置では、場所句が、日本語の場所句倒置では、名詞句が TP 指定部に移動すると考えるのが妥当であることを示した。

4. 今後の課題

3 節で論じたように、場所句倒置は、日英語において、異なる統語特性を持つため、その派生が異なると考えられる。これに関して重要なのは、なぜ日英語において、異なる派生が適用されるのかという理由を明らかにすることである。残念ながら、現段階では、具体的な分析を提示することはできないが、ここでは、(38) のようなりサーチ・クエスチョンを設定し、それに沿いながら、今後の課題や現時点での筆者の見解について述べることにする。

- (38) なぜ場所句倒置では、英語においてのみ、主語位置とみなされる TP 指定部に場所句が有標的に移動できるのか。

まず、英語の場所句倒置に焦点を絞り、(38) について検討していく。2 節でも述べたように、場所句が TP 指定部に移動しているとみなす分析方法は、多くの先行研究で採用されているが、この方法は、場所句倒置の語順形式を英語において作る上では、非常に簡潔で合理的なものであると考えられる。しかしながら、一般に主語名詞句が移動する TP 指定部に非名詞的要素が移動するという有標的な移動の仕組みについては、筆者の先行研究も含め、これまでのところ説得力がある説明がなされていない。「なぜ非名詞的要素である場所句が主語位置へ有標的に移動できるのか」という点が問題として残っている。

この問題と関連していると思われるのは、英語における場所句倒置の情報構造における有標性である。英語の場所句倒置では、場所句が話題として機能し、名詞句が焦点として機能する有標的な解釈しか得られない。情報構造特性の詳細については、谷川 (印刷中) に譲るが、特に、場所句の話題性については、いくつかの先行研究で、統語的特性としても具現化されてきた (Nishihara (1999), Tanigawa (2009))。それを示したものが (39) である。

- (39) a. In the park was John's brother.

- b. [TP in the park [VP was John's brother t_{PP}]]
- c. [TopP in the park [TP t_{PP}' [VP was John's brother t_{PP}]]]

(39b, c) は、場所句が TP 指定部を經由して最終的に TopP などの話題位置に移動していることを表している。この分析は、話題位置への移動という統語上の特性と、話題という意味情動的資格を獲得するという解釈上の特性を一致させたものである。⁸

ただし、分析 (39) において、十分に検討されてこなかった問題がある。それは、「なぜ一旦主語位置へ移動した場所句が、その後、話題位置へも移動するのか」という問題である。場所句が動詞に先行する語順は、それが TP 指定部に移動することで十分に保証される。よって、場所句は、原理上、そのまま TP 指定部に残ってもよいはずである。

上記のように、英語の場所句倒置に関しては、以下の (40) に示すような二つの特性があると考えられ、そのそれぞれについて問題が存在する。

- (40) a. 場所句は、主語位置へ有標的に移動する。
- b. 場所句は、最終的に話題位置へ移動し、話題として解釈される

上述の問題をどのように捉えるかであるが、筆者は、場所句の話題位置への移動に関する仕組みと場所句の TP 指定部への移動に関する仕組みが密接に関わり合っているのではないかと考えている。少なくとも英語においては、「当該の倒置形式が得られる場合には、場所句が必ず話題として機能する」という条件が成立する。これを考慮に入れると、英語の場所句倒置に関する特性である (40a) と (40b) は、完全に独立した偶発的事象ではなく、必然的な関連性や因果関係を持つのではないだろうか。そして、もし (40a) と (40b) に因果関係があるとすると (41) のような仮説が立てられるであろう。

- (41) 英語においては、左周辺部に話題位置が存在する場合にのみ、

場所句の主語位置及び話題位置への移動が誘発され、倒置形式ができる。

(41) の仮説は、直近の理論的枠組みである Chomsky (2008) にも深く関わるものだと考えられる。Chomsky (2008) では、TP 上位に存在するフェーズ主要部 C^0 が、素性継承 (feature inheritance) を通して、名詞句の TP 指定部への移動にも関与すると考えられている。例として、*Wh* 疑問文を見してみる。

- (42) a. What did John see?
b. [_{CP} C^0 [_{TP} T^0 [_{VP} John see what]]]
 [EF]
 [$u\phi$] → [$u\phi$]

Chomsky (2008) に従うと、*Wh* 疑問文では、(42b) のように、フェーズ主要部 C^0 が、端素性 (edge feature: EF) により、その指定部への疑問詞の移動を誘発する。また、これと同時に、それが持つ ϕ 素性が T^0 に継承されることにより、 C^0 は間接的に主語名詞句“John”の TP 指定部への移動にも関与することになる。

場所句倒置では、TP 上位に *TopP* のような話題位置が投射され、その主要部がフェーズ主要部として機能することになる。よって、*Top*⁰ のような主要部が、その指定部への移動と TP 指定部への移動の両方に関与することになる。筆者は、場所句倒置で見られる非名詞的要素の TP 指定部への移動及び語順の有標性が、話題位置がフェーズとなる場合に生じる素性継承の有標性に由来するのではないかと考えている。素性継承に対し、Chomsky (2008) とは異なる見解をとるものとして、Obata (2010) や Goto (2010) がある。これらの研究では、主節フェーズ主要部の解釈不可能素性は T^0 に継承されず、そのままフェーズ主要部に残留することが可能であると提案されており、これに従うと、解釈不可能な ϕ 素性は、主節の C^0 や *Top*⁰ に残留することが可能となる。具体

的な形での研究はこれからであるが、このような素性継承の仕組みを精緻化した上で、「主節の Top^0 からの φ 素性の継承は随意的であり、この継承が起こらない場合に、場所句倒置が得られる」という主張や提案を行うつもりである。

同様の主張や提案は、場所句倒置だけでなく、以下のような倒置形式にも当てはまると考えられる。

- (43) a. Standing there was John's brother.
b. Also interesting is this book.

(43) の倒置構文は、Emonds (1970) で *Preposing Around be* として導入されたもので、倒置語順形式において文頭に位置する非名詞的要素が話題として機能する点で、場所句倒置と同一の分類がなされるものである。これらでも Top^0 のような話題位置が左周辺部に投射されると考えられたため、「英語では、 Top^0 が投射される場合に、 φ 素性の継承が随意的になり、この継承が起こらない場合に、倒置形式が得られる」という倒置一般に関する主張や提案ができるだろうと考えている。⁹

ここまでは、英語の場所句倒置に焦点を絞り、「なぜ英語の場所句倒置においてのみ、場所句が TP 指定部に移動できるのか」について議論してきた。本稿では、最後に、「なぜ日本語の場所句倒置では、場所句が TP 指定部に移動できないのか」という点に関する言及を行い、4 節の議論を締めくくりにする。上では、英語にける場所句の有標的な移動は、 $TopP$ が投射される場合のみ可能となる有標的な素性継承に還元されるという見解を述べた。もしこのような見解が英語に関してできるとするならば、日本語において、場所句の有標的な移動が不可能であることは、話題位置が欠如しているということに還元することができるであろう。日本語の場所句倒置では、場所句が話題としても焦点としても解釈され、英語の場合のような有標的な解釈は生じない。また、統語上、左周辺部に $TopP$ のような話題位置が存在しないことも純然たる統語

的観点から示すことができる。そうすると、日本語の場所句倒置では、 ϕ 素性の T^0 への継承が常に生じるために、場所句ではなく名詞句が TP 指定部に移動すると考えられるであろう。

5. 結語

以上、本稿では、日英語の場所句倒置が異なる統語派生を持つと論じた上で、英語の場合の有標的派生や日英語間の派生の違いがなぜ生じるのかについて、生成言語理論の観点から探る方策と研究の方向性について述べた。今後は、4 節で述べた現時点での課題やそれに関する考えを具体化、精緻化して提示することを当座の目標としたい。

注

- * 本稿は、日本エドワード・サピア協会第 25 回研究発表会（於専修大学）における口頭発表「日英語における場所句構文の比較考察」をはじめとするこれまでの研究に基づくもので、筆者が今後の研究を進めていく上での布石として、現時点での考えや見解を表したものである。まず、口頭発表等でコメントをくださった方々と英語例文の文法性判断に協力してくださった Rebecca McKeown 氏に感謝申し上げたい。加えて、筆者が特任講師として在籍した二年間において、貴重な研究の場を与えてくださった英語分科会をはじめとする三重大の関係者の方々にも感謝申し上げたい。
1. 英語の場所句倒置に関しては、場所句が T^0 の持つ ϕ 素性と照合を行っていないと脚注で述べるに留めている (Ura (1996:431, footnote 15, 2000:171, footnote 14)。
 2. Ura (1996, 2000) の分析では、弱素性である名詞句の格素性と T^0 の持つ格素性の消去のため、名詞句の格素性が LF で T^0 に移動することになる。Ura (1996, 2000) は、この移動がスコープに影響を与えるか否かについて言及していないが、LF での素性のみの移動はスコープに影響を与えないという前提の基に議論を行っていると考えられる。
 3. Ura (1996, 2000) の議論は、場所句倒置のスコープ解釈を一義的だとする Kuno (1973) の考察に基づいている。しかし、Kuno (1973:363) が一義的解釈を持つとして挙げている

る例文 (ib) も、実際のところ、解釈が多義的だと考えられる。

- (i) a. 誰かがどの部屋にもいた。
b. どの部屋にも誰かがいた。

(ia) は、一見、理解し難い文に思えるかもしれないが、ホラー映画や推理小説の殺人現場等で、「複数の人物のうち、ある特定の一人（殺人鬼や犯人）が、すべての部屋にいた」という意味で解釈できる。この文で得られるのは、「誰か」が「どの部屋」よりも広いスコープをとるこの読みだけである。その一方で、(ib) では、「すべての部屋に関して、そのそれぞれに、人物がいた」という読みが得られる。Kuno (1973) によれば、(ib) で得られるのは、「どの部屋」が「誰か」よりも広いスコープをとるこの読みだけだということだが、筆者には、この解釈に加え、(ia) と同じ解釈が二次的解釈として得られる。

4. 英語の場合、再帰代名詞に関しては、TP 指定部以外に位置する目的語等の要素が先行詞になる可能性がある。一方、数量詞のスコープに関しては、日本語の文が一義的である場合に、英語の対応文が多義的である可能性がある。
5. Ura (1996:431, 2000:171) は、(35) のような例文を“?”と判断し、名詞句が PRO コントローラになり得るという見解をとっている。しかし、筆者の調査によると、(35) の文法性はそれよりも著しく悪いもので、この判断に基づいて、名詞句が PRO コントローラになり得ないという見解をとる。
6. Ura (1996:426, 2000:167) は、PRO コントロールに関する当該の仮定が Chomsky (1995:284) から引用した例文 (i) からも支持されると述べている。

(i) **There arrived three men_i (last night) without PRO_i identifying themselves.**

しかし、Ura 本人も認めているように、この例文は、実際のところ、文法性がそれほど高いものではなく、Lasnik (1996) の指摘によると、without 節を文頭に移動させると、(ii) に示すように、その逸脱性はさらに高いものとなる。

(ii) **?* Without PRO_i identifying themselves, there arrived three men_i.**
7. 「ずに」節が文頭に現れているケースについては、当該節が基底的に VP や vP に付加した後スクランブリングによって文頭に移動したと考える。
8. 場所句が左周辺部まで移動することを示唆する純然たる統語的根拠もいくつかあるがここでは割愛する。詳細は、Tanigawa (2009) 等を参照されたい。
9. フランス語では、Wh 疑問文等の wh 要素が文頭に存在する環境において、同様の倒置形式が得られる。これは、フランス語の場合、φ 素性の継承が生じないようなフェーズ主要部が C⁰ となることを示唆すると同時に、言語によって、素性継承が起こらないフェーズ主要部はパラミター化されているという可能性も示唆するであろう。

参考文献

- Bresnan, Joan (1994) "Locative Inversion and the Architecture of Universal Grammar," *Language* 70, 78–96.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos Otero, and Maria-Luisa Zubizarreta, 133–166, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Collins, Chris (1997) *Local Economy*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Coopmans, Peter (1989) "Where Stylistic and Syntactic Processes Meet: Locative Inversion in English," *Language* 65, 728–751.
- Emonds, Joseph E. (1970) *Root and Structure-Preserving Transformations*, Doctoral dissertation, MIT.
- Goto, Nobu (2010) "Some Consequences of Feature Inheritance," 『東北英文学研究』 第1号 27–50.
- Kishimoto, Hideki (2000) "Locational Verbs, Agreement, and Object Shift in Japanese," *The Linguistic Review* 17, 53–109.
- 岸本秀樹 (2005) 『統語構造と文法関係』 くろしお出版.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Lasnik, Howard (1996) "On Certain Structural Aspects of Anaphora," Paper presented at the Linguist List On-Line Conference on Geometric and Thematic Structure in Binding.
- Matsumoto, Yo (1990) "On the Syntax of Japanese "Intransitivizing" *-te aru* Construction: Non-lexical Function Changing," *Proceedings of the 26th Regional Meeting of the Chicago Linguistics Society*, 277–291.
- Muromatsu, Keiko (1997) "Two Types of Existentials: Evidence from Japanese," *Lingua* 101, 245–269.
- 中右実 (1998) 「空間と存在の構図」 中右実・西村義樹著 『構文と事象構造』 第1部 研究社出版.
- Nishihara, Toshiaki (1999) "On Locative Inversion and *There*-Construction," *English Linguistics* 16, 381–404.
- Obata, Miki (2010) *Root, Successive-Cyclic and Feature-Splitting Internal Merge: Implications for Feature-Inheritance and Transfer*, Doctoral dissertation,

University of Michigan.

- Perlmutter, David M (1984) “Working 1s and Inversion in Italian, Japanese, and Quechua,” *Studies in Relational Grammar*, ed. by David Perlmutter and Carol G. Rosen, 292–330, University of Chicago Press, Chicago and London.
- Saito, Mamoru (1985) *Some Asymmetries in Japanese and their Theoretical Implications*, Doctoral dissertation, MIT.
- Takezawa, Koichi (1993) “Secondary Predication and Locative/Goal Phrases,” *Japanese Syntax in Comparative Grammar*, ed. by Nobuko Hasegawa, 45–77, Kurosio Publishers, Tokyo.
- 竹沢幸一 (2000) 「アルの統語的二面性—be/have との比較に基づく日本語のいくつかの統語的解体の試み—」 『「東アジア言語文化の総合的研究」筑波大学学内プロジェクト (A) 研究報告書』 76–100 筑波大学文芸・言語学系.
- Tanigawa, Shin-ichi (2009) A Split Feature Analysis of Topicalization and Locative Inversion, *JELS* 26, 299–308.
- 谷川晋一 (印刷中) 「日英語における場所句構文の情報構造」 『名古屋芸術大学研究紀要』 第 33 卷.
- Ura, Hiroyuki (1996) *Multiple Feature-checking: A Theory of Grammatical Function Splitting*, Doctoral dissertation, MIT.
- Ura, Hiroyuki (2000) *Checking Theory and Grammatical Functions in Universal Grammar*, Oxford University Press, New York.